

アメリカ学会会報

— The American Studies Newsletter —

No.217

April 2025

彼我を顧みる

中 野 聡

本稿を執筆している時点で第2次トランプ政権が発足してから一か月余りが経った。次から次へと毎日どころか数時間おきのペースで驚天動地のニュースがワシントン DC から世界に向けて発せられる状況が続いていて、何か批評しようと思っても、とても筆（キーボード）が追いつかない。これから数ヶ月のうちに、与党・共和党が両院で多数を占める連邦議会や、共和党政権が指名した判事が三分の二を占める連邦最高裁が、その立法や司法判断によってどこまで新政権の諸政策を追認・容認するかによっても左右されるのだろうか、現時点で太平洋の向こう側から聞こえてくるのは、「法の支配」あるいは「三権分立」が、深刻な危機を乗り越えて土砂崩れでも起こしているかのような轟音だ。その一方で、彼の国についての専門家集団としてアメリカ学会に集う諸氏は、その知見と冷静な観察眼をもって、学生・市民あるいは職場の同僚に対して、この事態をアカデミアの立場から日々解説しなければならぬのだから大変である。現職との関係でアメリカ研究・教育の現場を離れて久しい私は、現在、その責を逃れていることに、本音を言えば、少々ほっとしている。

昔話となり恐縮だが、2003 年夏、京都アメリカ研究セミナーのある部会で、私は（乱暴にまとめると）フィリピンとアメリカふたつの民主制が辿ってきた混乱と不正に満ちた歴史を、共通する選挙制度と政治文化が絡み合い生まれた「驚くべき双子 (remarkable twins)」ではないかと論じたことがある。このとき或るアメリカ人研究者が顔を真っ赤にして怒った。すでに 2000 年大統領選挙の混乱をへた後だったので、私の話は珍しくも何ともなかったはずなのだが（一応つけ加えさせていただくと、この時の話の元になる論文を日本語で 1999 年に発表していたのが私の小さな自慢である）、アメリカが世界の民主主義拡大に果たしてきた使命を論じる立場からは、フィリピンとアメリカが選挙民主制における双子だなどという話は受け入れがたい暴論であったのかもしれない（私にはまったく矛盾しない話だと思われたのだ

けれども）。

素朴な対外認識においては彼我の差異や優劣が自明視されがちだ。この点では、アメリカ人のフィリピン認識をあげつらっている場合ではない。私たち全てに自戒が必要である。日本人の場合、隣国に対しては、およそ根拠に欠ける自他の優劣がナショナリズムと結びついて繰り返し語られてきた。アメリカ像という点では、明治以来、自画像を反転するように相手を持ち上げたり貶めたりする時期が繰り返され、国家指導部がその対米認識の甘さから、80 年前には国を破滅の瀬戸際に追い込むような誤りを犯したこともあった。私の世代においてバブル期を中心に繰り返し語られてきたアメリカ衰退論もまた、現在となっては戦前の対米認識と五十歩百歩の誤りだったということなのかもしれない。

NY タイムズなどの論説で根気強く批判が繰り返されている、現政権の越権的な大統領令の濫発や、軍・官僚人事権の強権的行使についても、驚き呆れる前に、まずは自らをふり返っておきたいものだ。たとえば 21 世紀の日本政治では、いわゆる官邸主導のもとで行われた憲法上疑義の強い閣議決定（集団的自衛権の行使容認）や日本学術会議の会員候補者任命拒否などは、憲政危機 (constitutional crisis) と呼ばれても良い出来事だった。しかしそれらに起因する政権交代はなかったし、憲法問題としては放置されたままになった。考えてみれば、「法の支配」も「三権分立」も、それらが確立されていると思いついていた国々・社会においてさえ、その生殺与奪は、あくまで権力を付与された人間の作為と不作為に委ねられているのだらう。そう言えば、「学長のリーダーシップ」が連呼されてきた日本の諸国立大学法人 20 年の歴史においても、「ワイルド・ウエスト」的ガバナンスが散見されてこなかったとは言えないのではないかと、彼我を顧みる毎日なのである。

(一橋大学)

2025 年アメリカ学会 第 59 回年次大会プログラム

1. 開催日 2025 年 5 月 31 日(土)・6 月 1 日(日)
2. 会場 北海道大学札幌キャンパス人文・社会科学総合教育研究棟 札幌市北区北 10 条西 7 丁目
大会企画委員長 菅 (七戸) 美弥 m-suga アットマーク u-gakugei.ac.jp
会場責任者 会沢 恒 aizawa アットマーク juris.hokudai.ac.jp
3. プログラム (報告要旨は別に「報告要旨集」に掲載されます。時間は全て日本標準時です)
 - * タイトルの日英別は、発表演語によるものです。
 - * 教室は変更の可能性があります。
 - * 未定部分は今後ホームページや ML で周知致します。
 - * 今大会の分科会はオンラインで開催されます。

第 1 日 2025 年 5 月 31 日(土)

午前部

自由論題報告 9:30～11:30

【Session A 政治・宗教・歴史記憶 Politics, Religion, and Historical Memory】8 番教室

司会：山本貴裕 (広島経済大学)

討論者：井上弘貴 (神戸大学)

1. 報告者：相川裕亮 (金城学院大学)
「米福音派の日本伝道：ビリー・グラハム日本クルセードの影響」
2. 報告者：上野継義 (京都産業大学)
「“安全第一”の起源物語をめぐるトランスナショナル・ヒストリー—記憶は忘却の果実—」
3. 報告者：李雨桐 (神戸大学・院)
「オピオイド・パンデミックを巡る州と地方との攻防に見るアメリカ州司法長官の役割」

【Session B 移民政策・社会運動史・メディア Immigration Policy and Transnational Ethnic Studies】2 番教室

司会：今野裕子 (亜細亜大学)

討論者：佐原彩子 (共立女子大学)

1. 報告者：鶴原麻美 (京都大学・院聴講生)
「アラブ系アメリカ人メディアに見る『アラブの春』」
2. 報告者：藤重仁子 (森ノ宮医療大学)
「アメリカの外国人看護師受け入れ政策の展開過程—第二次世界大戦後から 1989 年移民看護救済法成立まで—」
3. 報告者：山下靖子 (津田塾大学)
「戦後ハワイにおける『沖縄系移民』と『日系アメリカ人』のエスニシティの変容—沖縄の『日本復帰』問題を巡る諸相から」

【Session C 教育・歴史・エスニシティ Education, History, and Ethnicity】5 番教室

司会：Koji Ito 伊藤考治 (Osaka University 大阪大学)

討論者：Rika Lee 李里花 (Chuo University 中央大学)

1. 報告者：Jason Barrows (Kyoto Prefectural University of Medicine 京都府立医科大学)
“Bridging Historical Gaps: Evaluating the Representation of Japanese Americans in U.S. Social Studies Textbooks”
2. 報告者：Roderick Labrador (University of Hawai‘i at Mānoa)
“Reeling in Reality: Whitewashing and Whiting Out WWII Japanese American Incarceration”
3. 報告者：Mary Kunmi Yu Danico (University of Hawai‘i at Mānoa)
“Hidden Stories of Honouliuli, Hawaii: The Korean Prisoners of War 1942–46”

【Session D 環太平洋の文化交流とエスニシティ Transpacific Creative Arts and Ethnicity】1 番教室

司会：渡久山幸功 (琉球大学)

討論者：Claire Ravenscroft (International Christian University 国際基督教大学)

1. 報告者：宮下和子 (鹿屋体育大学・名)
「Foster at 200 と日本人の『スティーブン・フォスター観』」
2. 報告者：Ethan Caldwell (University of Hawai‘i at Mānoa)
“Black Resonance: Remixing Oceanic Blackness and Belonging Through Song”
3. 報告者：Chang Liu (Heidelberg University)
“From *Erotica* to *Ray of Light*: Madonna’s American Pop Evolution and the Challenge of Ageism”

休憩 12:00～12:45

午後の部

理事・評議員会 12:00～12:45 8 番教室
清水博賞・中原伸之賞授賞式 12:45～13:00 8 番教室

第一部 シンポジウム「北海道とアメリカ」 13:15～16:00 8 番教室

司会：土田映子（北海道大学）

討論者：中嶋啓雄（大阪大学）

報告者：

小檜山ルイ（フェリス女学院大学）

「アメリカから来たキリスト教と北海道—女性の経験を加えて」

佐藤円（大妻女子大学）

「アメリカ先住民とアイヌ—歴史的視点からの比較（仮）」

宮武公夫（北海道大学）

「アイヌの人々と 1904 年セントルイス博覧会—残されたモノと記憶を通して」

第二部 開催校企画 1 ラウンドテーブル「トランプ II の半年」 16:10～17:40 8 番教室

司会：小浜祥子（北海道大学）

話題提供者：

渡辺将人（慶応義塾大学）

藤本龍児（帝京大学）

馬場香織（東京大学）

懇親会 18:30 ～ 20:30（予定） 札幌ガーデンパレス

第 2 日 2025 年 6 月 1 日（日）

午前の部

部会・ワークショップ 9:30～12:00

【ASA 関連ラウンドテーブル】5 番教室

「日米におけるアメリカ研究の実践—『アメリカ研究』と“American Studies”の現在地と展望」

司会：坂下史子（上智大学）

パネリスト：

有光道生（慶応義塾大学）

清水さゆり（ライス大学）

関口洋平（フェリス女学院大学）

松田武（京都外国語大学前学長・大阪大学名誉教授）

吉原真里（ハワイ大学マノア校・東京大学）

【部会 A キア・アメリカ—抵抗とサバイバルの歴史と文化】1 番教室

司会：瀬名波栄潤（北海道大学）

討論者：高内悠貴（弘前大学）

報告者：

兼子歩（明治大学）

「キア運動を生み出す文脈としての多人種都市—戦後ホモファイル運動の登場とロスアンジェルス」

ハーン小路恭子（専修大学）

「インターセクショナリティとしてのキアネス—ドロシー・アリスン作品に見る階級・場所性・セクシュアリティ」

菅野優香（同志社大学）

「キアな日系アメリカ人史を探して—TT Takemoto の実験映画」

【部会 B アメリカの大学を取り巻く諸状況】2 番教室

司会：会沢恒（北海道大学）

報告者：

藤岡真樹（京都大学・講）

「歴史的観点から見た STEM 教育」

横大道聡（慶応義塾大学）

「キャンパスにおける表現の自由」
吉田香奈（広島大学）
「大学生の教育費負担軽減と連邦学資ローン」

休憩 12:00～12:45
総会 12:45～13:15 W103 教室

開催校企画 2 ラウンドテーブル 12:00～12:45 W408 教室

“Iroquois (Haudenosaunee) and Ainu Internationalism: Aspects of Their Relations with other Nations from the Seventeenth Century to the Present”

Panelists:

Scott Manning Stevens (Akwesasne Mohawk) (Syracuse University)
Evan Haefeli (Texas A&M University)
Hirofumi Kato 加藤博文 (Hokkaido University 北海道大学)
Comment: Takeo Mori 森丈夫 (Fukuoka University 福岡大学)

午後の部

部会・ワークショップ 13:30～16:00

【OAH-ASAK ワークショップ “Desire, Pain, and Melancholia”】5 番教室

Chair: Hiroyuki Matsubara 松原宏之 (Rikkyo University 立教大学)

Speakers:

Rebecca L. Davis (OAH, University of Delaware)
“Writing—and Teaching—about the History of Sexuality in America”
Cara C. Caddoo (OAH, Indiana University Bloomington)
“Interracial Desire and the Regulation of Hollywood Film”
Jung-ha Kim (ASAK, Seoul National University)
“Rethinking the Death Drive as Gendered Exhaustion in Yiyun Li’s Writings”
Yuri Amano 天野由莉 (Musashi University 武蔵大学)
“Pain, Power, and Professional Identity: Southern Physicians and Enslaved Patients in Antebellum America”

【部会 C アメリカ文化研究は、今—アメリカ文化をどう教えるか？／文化でアメリカをどう教えるか？】1 番教室

司会：中垣恒太郎（専修大学）

討論者：佐々木優（専修大学）・小森真樹（武蔵大学）

報告者：

馬場聡（日本女子大学）
「女子高等教育機関におけるアメリカ研究カリキュラムの変遷と展望—副専攻プログラムの可能性」
丸山雄生（東海大学）
「ヴィーガン・スタディーズの教育と実践：（反）肉食から考えるアメリカ文化」
北田依利（東京大学・東京カレッジ・講）
「日本で・日本語で、アメリカ史を教えるための目標設定とアプローチの事例報告」
地村みゆき（愛知大学）
「先住民視点から紐解くアメリカの歴史と社会：一般教育科目『民族と文化』における授業実践」

【部会 D 食・農業・漁業でみる太平洋世界とアメリカ】2 番教室

司会：加藤（磯野）順子（早稲田大学・講）

討論者：久野愛（東京大学）

報告者：

新田万里江（武蔵大学）
「札幌農学校における米国の植物帝国主義と日本のセトラコロニアリズム」
小川真和子（立命館大学）
「海から見たハワイ：ハワイにおける日系水産業の発展をめぐるハワイ準州と連邦政府との軋轢」
二村太郎（同志社大学）
「アメリカ合衆国における都市の『農と食の空間』と地域社会のかかわり：デトロイトでの実践を中心に」

4. 注意事項

- 1) 今大会は分科会（オンライン開催）を除き対面のみでの開催となります。

- 2) 大会参加登録は、参加登録ページの URL を、学会ホームページ及び、アメリカ学会会員用メールリングリストにて配信いたしますので、2025 年 5 月 23 日(金)までをお願いいたします。会員の方でメールが届かなかった方は、「迷惑メール (junk mail)」フォルダもご確認ください。見つからなかった場合は、お手数をおかけしますが、学会 HP の「お問い合わせ・応募フォーム」の年次大会企画委員会までご連絡ください。
- 3) 年会費の当日払いは受け付けられませんのでご了承ください。
- 4) 会場までの交通アクセスについては、下記 5. の他、学会ホームページをご覧ください。宿泊や交通手段の確保は各自でお願いいたします。
- 5) 非会員の大会参加費は 1,000 円です。大会受付にてお支払いください。
- 6) 理事・評議員会について、弁当の注文は受け付けませんので、ご了承ください。

5. 会場案内

受付	W102 教室
賛助会員（出版社）ブース	W102 教室
会員控室・ゲスト控室	W101 教室
大会本部	W302 教室

〈北海道大学札幌キャンパス人文・社会科学総合教育研究棟へのアクセス〉

- ・ JR「札幌駅」下車、徒歩 13～14 分、地下鉄南北線「さっぽろ駅」下車、徒歩 17 分
- ・ 地下鉄南北線「北 12 条駅」下車、徒歩 8 分



第 59 回年次大会分科会のご案内

* 本大会の分科会は全てオンラインでの開催になります。

* 未定のスケジュール等については、後日改めて通知いたします。

1. 「アメリカ政治」

責任者：松井孝太（杏林大学）kmatsui アットマーク ks.kyorin-u.ac.jp

報告者 1：大津留（北川）智恵子（関西大学）

「アメリカ国内に広がる『国境』：移民をめぐる立ち位置の対立（仮）」

報告者 2：小椋郁馬（一橋大学）

「アメリカの有権者における世論調査への表現的な回答」

開催日時：6 月 6 日(金) 19:00～20:40 / 形式：Zoom で開催（URL 等は後日連絡）

本年度のアメリカ政治分科会は、2 名の会員に最新の研究成果を報告いただく。大津留（北川）会員は、大統領選の争点の一つであった非合法滞在者問題に関して報告する。民主党支持者の多くは市民権への道を、共和党支持

者の多くは国外追放をその答えとし、聖域都市は葛藤を経ながらも受入れ体制を整えた。連邦と州、地方政体、そして市民社会のアクターが、分断を乗り越えるために何ができるのかについて、現地調査に基づいて考察する。小椋会員は、世論調査への「表現的な回答」と呼ばれる現象について報告する。アメリカの政治行動論研究では、有権者が世論調査に回答する際に、政党帰属意識などの政治的先傾向に沿うよう、本心とは異なる認識や態度を表明する可能性が指摘されており、有権者における分極化の進展とともに、注目を集めている。報告者が実施したサーベイ実験の結果を用いて、表現的な調査への回答に関するデータを示し、研究の課題・展望について述べる。

2. 「アメリカ国際関係史研究」

責任者：吉留公太（神奈川大学）ft101846cs アットマーク jindai.jp

報告者：尾身悠一郎（自然エネルギー財団）

「尾身悠一郎著『国際経済と冷戦の変容：カーター政権と危機の1979年』（千倉書房、2024年）合評会」

討論者：小野沢透（京都大学）

開催日時：6月8日（日）13：00 開始／形式：Zoom で開催（URL 等は後日連絡）

今年のアメリカ国際関係史研究分科会は、尾身会員の著書『国際経済と冷戦の変容：カーター政権と危機の1979年』の合評会を行う。対象書はドル価値の維持を切り口としてカーター政権後半の中東政策の変容を論じている点に独自性がある。また、対象書は多数の公文書を用いて議論を裏付けており、カーター政権に関する邦語の史料実証研究が限られていることから注目値する。分科会当日は、報告者が対象書の執筆意図と概要を紹介した後、討論者による問題提起を行う。分科会参加者による質疑応答も予定している。

3. 「日米関係」

責任者：末次俊之（松蔭大学）suetoshi007 アットマーク gmail.com

報告者：久保庭総一郎（読売新聞社）

「デジタル時代のメディア環境：NYTの成功、地方紙の衰退、そしてメディアの二極化」

開催日時：6月7日（土）19：00～20：30／形式：Zoom で開催（URL 等は後日連絡）

2000年代以降のデジタル化の進展により、米メディア業界の勢力図が大きく変化している。デジタル化の勝ち組として知られる『ニューヨーク・タイムズ』（NYT）は2016年以降、有料デジタル購読者を積み増し、デジタルシフトに成功した。ニュース配信の空間的制約がなくなり、全米へ影響力を強めている。一方で、地方紙は衰退が進み、「ニュースの砂漠」現象が加速。全米約3,000郡のうち、約7%はローカル紙が全く存在せず、1紙しか存在しない郡を含めると半数以上となっている。空白を埋めるように右派・左派メディアによる視聴者取り込みも加速している。

本発表では、NYTに代表されるデジタル化への移行、地方紙の衰退、党派メディアの台頭という3つの視点から、政治とニュースに関して考察する。2024年の大統領選では、数時間ノーカットで放送する有名ポットキャストが存在感を示した。また日本においても新聞購読率の低下が進んでいるが、米国のような類似の動きが起こり得るか考察する。

4. 「経済・経済史」

本年度休会

5. 「アジア系アメリカ研究」

責任者：和泉真澄（同志社大学）mizumi アットマーク mail.doshisha.ac.jp

報告者：嶋田健一郎（京都大学人間・環境学研究所科博士後期課程）

「占領期における日本人・日系人の連合国（主にアメリカ合衆国・カナダ）からの引き揚げについて—活字メディアへの表出を中心として」

開催日時：5月30日（金）18：00～19：30／形式：Zoom で開催（URL 等は後日連絡）

報告者はリサーチアシスタントとして、Past Wrongs Future Choices プロジェクトのアーカイブスクラスターの調査題目の一つである、「戦後・占領期における日本人および日系人の連合国からの引き揚げ」*の一次史料調査を担当する。本報告では、先行研究を整理した上で、占領期日本の活字メディアにおいて日本人および日系人の連合国からの引き揚げがどのように報道され、引き揚げの当事者らが何を語ったのかを細かく観察することによって、かれらの体験についての日本国内における一般的な認知について考察する。また戦中の交換船による帰国者による手記との比較から、敗戦国となった日本へのこれらの連合国からの引き揚げの体験者の語りの特徴を、GHQによる検閲などの背景を踏まえて検証する。

*当該プロジェクトは連合国としてはカナダ、アメリカ合衆国、ブラジル、オーストラリアをとりあげる。

6. 「アメリカ女性史・ジェンダー研究」

責任者：鈴木周太郎（鶴見大学）suzuki-s アットマーク tsurumi-u.ac.jp

報告者：板橋晶子（一橋大学他・講）

「第二次世界大戦期アメリカの広告におけるジェンダー表象—戦時下における『女らしさ』」

開催日時：6月6日（金）19：00～20：30／形式：Zoom で開催（URL 等は後日連絡）

第二次世界大戦下のアメリカでは総力戦体制の下、女性たちは前例のない規模で軍需産業における労働力として動員され、愛国者として称揚された。このような経験はアメリカの女性たちの社会的地位に変化をもたらし、従来の性別役割からの脱却の機会を提供したかのように見えたが、戦後になると女性の本分は家庭にあるというジェンダー規範が再び強まることになる。本報告は、報告者の博士論文での考察をもとに、戦時下の政府やメディアによる宣伝活動の中で示された女性像が、女性の新しい可能性を示すと同時に既存のジェンダー規範を強調するという矛盾を抱えていたことに注目する。政府による宣伝活動や化粧品や下着の広告における女性像などを紹介しつつ、戦争とジェンダー秩序の関係についての広範な議論を促していく。

7. 「アメリカ先住民研究」

責任者：佐藤円（大妻女子大学）mdsato アットマーク otsuna.ac.jp

報告者：岩崎佳孝（甲南女子大学）

「先住民のボーダーランズ—19 世紀後半～20 世紀前半の加米国境地域からの考察」

開催日時：6 月 2 日（月）19：00 開始／形式：Zoom で開催（URL 等は後日連絡）

本報告ではまず、19 世紀後半～20 世紀前半までのカナダ＝アメリカ合衆国西部国境地域に生活圏をもつ先住民が生きた「ボーダーランズ（borderlands）」という世界観の概念を、「国境（border）／境界（boundary）」あるいは「辺境・フロンティア（frontier）」との異同も含め整理したい。それによって、外部から「部族」として括られる先住民集団は、本来的にいかなる在りようであったのかについて理解を深める。

報告ではまた、ボーダーランズに国家統治を拡張するカナダと合衆国の先住民政策が、ボーダーランズの先住民—具体的には平原オジブワ（Plains Ojibwa あるいは Chippewa）、平原クリー（Plains Cree）、アシニボイン（Assiniboine）、そしてフランス系（一部イギリス系）白人と先住民との混血者メティ（Métis）ら—にどのような影響を与えたのかについて考察する。そしてこれら「先住民集団」の多くが、両国に包摂・統合されていく過程でそれ以前のかたちとは異なるものとして発現し、現在に至っている事情を理解する。

8. 「初期アメリカ」

責任者：鰐淵秀一（明治大学）swanibuchi アットマーク meiji.ac.jp

報告者：上村剛（関西学院大学）

討論者：天野由莉（武蔵大学）・鰐淵秀一

上村剛『アメリカ革命』（中央公論新社、2024 年）合評会

開催日時：6 月 7 日（土）14：00 開始／形式：Zoom で開催（URL 等は後日連絡）

政治思想史研究者である上村剛氏をゲストに迎えて、氏の最新の著作『アメリカ革命』の合評会を開催する。同書は新書形式で著されたアメリカ革命の概説書としては本邦初のものとともに、連邦憲法制定を軸に近年の研究成果を踏まえた独自の革命史像を提示している。まず、上村氏に本書の執筆意図と主要論点を紹介いただき、その後、評者によるコメントを行う。新書ながら独創的な論点に富む同書について、その学術的意義や初期アメリカ研究にとって持つ意味について、関心を共有する会員とともに議論を行う機会としたい。

9. 「文化・芸術史」

責任者：小林剛（関西大学）go アットマーク kansai-u.ac.jp

報告者：永富真梨（関西大学）

『『エリート』との闘い：2020 年代のカントリー音楽とトランプ 2.0 のアメリカ」

開催日時：5 月 30 日（金）19：00～20：30／形式：Zoom で開催（URL 等は後日連絡）

今回の分科会では、2020 年代以降のカントリー音楽を概観しながら、アメリカのポピュラー音楽に見られるトランプ 2.0 に特徴的な文化現象を模索する。2020 年代以降のカントリーは、ビルボード誌の総合チャートの上位を独占するほど、アメリカを代表する人気のジャンルとなった。黒人や性的マイノリティのアーティストの活躍も顕著ながら、陰謀論とトランプ大統領を公に支持する保守の白人男性の歌手も健在である。これらのアーティストは、多様性に関して対照的な考えを持つが、どちらもエリートを彷彿させる態度を嫌い、田舎の労働者階級の営みを表現することが多い。バイデン前大統領もトランプ現大統領も定義は違えども両者とも「エリート」に対して警鐘を鳴らす。本発表では、「エリート」に対する闘いの音楽としてカントリーを捉え、現代アメリカにおいてどのような意味を持つのかを考察する。

10. 「アメリカ社会と人種」

責任者：山本航平（就実大学）duchpb42 アットマーク gmail.com

報告者：小原豊志（東北大学）

「アンテベラム期のポピュリズム運動における『人種』—『ドアの反乱』を中心に」

開催日時：5 月 29 日（木）18：00 開始（報告 60 分程度、質疑 30 分程度）／形式：Zoom で開催（URL 等は後日連絡）

1840 年代初頭、ニューイングランドの小州ロードアイランドにおいて州統治体制を刷新せんとする試みが発生した。その際に採られた方法が既存の州政府の認可を得ずして制定された州憲法（「人民憲法」）を通じてであった

こと、そしてこの試みが最終的には州武器庫の襲撃という「暴力」に行きついたことから、この出来事は「ドアの反乱」と呼ばれている。報告者は、この政府改廃運動を人民主権原理の観点からアメリカ・ポピュリズムの源流ととらえる。そのうえで、この原理のもとに制定されたはずの人民憲法において黒人が選挙権から排除されたことの意味、およびこの運動の弾圧後に従来の支配層が実施した選挙権改革において黒人選挙権が容認されたことの意味を考察することにより、アンテベラム期のポピュリズム運動における「人種」の位置づけを考察したい。

第 60 回年次大会について

第 60 回年次大会は、2026 年 6 月上旬に東京学芸大学にて開催を予定しています。開催日時については、後日会報にてお知らせいたします。

2025 年プロセミナー開催のご案内

今年のプロセミナーは東京で対面開催いたします。アメリカ学会会員以外にも開かれておりますので、お誘い合わせの上どうぞふってご参加ください。

会場：立教大学池袋キャンパス太刀川記念館 3 階カンファレンス・ルーム

日時：6 月 3 日（火）13 時半～17 時（時間は変更の可能性あります）

報告者：

蒲大輝（一橋大学・院）

“Swinging the Black and White: The Italo-Ethiopian War and Race-Making among Italian Americans and African Americans in 1930s Harlem”

松本一晟（南カリフォルニア大学・院）

“Native Hawaiian and Samoan Migrant Women Lei Vendors in Transpacific Honolulu”

手塚颯一朗（慶応義塾大学・院）

“From Partner to Challenge: How Far does American Influence Extend within NATO?”

徳原拓哉（横浜国際高校）

““Shared Historical Authority” as a Negotiated Historical Practice: Examining the Negotiation and Allocation of “Authority,” “Authorship,” and “Expertise” in the History-Making Process of Manga”

張汝楠（早稲田大学・院）

“The Path to Personhood: The Posthumanist Worldview in Kiln People”

コメンテーター

Jolie Sheffer（ASA, Bowling Green State University, Department of English）

Cara C. Caddoo（OAH, Indiana University Bloomington, Department of History）

Rebecca Davis（OAH, University of Delaware, Department of History）

※他数名のコメンテーターがオンライン参加する可能性があります。

会場・プログラム詳細については、5 月に学会 ML でご案内いたします。

国際委員会

アメリカ学会海外渡航奨励金

— 国外の学会やシンポジウムで発表する方を対象とする助成制度のご案内 —

このたびアメリカ学会では、国外での学会やシンポジウムにて発表する方を対象に、以下の要領で渡航奨励金を支給することになりました。本制度による給付を希望する方は積極的にご応募ください。なお、今回（前期）の応募対象は、2025 年 8 月～2026 年 2 月に開催される学会です。2026 年 3 月～7 月開催の学会については、後期（12 月募集）の対象となります。

1. 応募資格

(1) アメリカ学会の会員であること。年会費の滞納がないこと。

* 応募時にアメリカ学会への入会手続中である場合はその旨明示すること。

(2) 国際学会やシンポジウムでの発表時に、日本に在住し、日本からの旅費を要すること。

(3) 発表内容がアメリカ研究に関するものであること。

(4) 大学院生等の若手研究者を優先的に検討し、そのほか、助成の必要性、発表の内容を総合的に判断する。

2. 審査基準

- (1) 大学院生等の若手研究者を優先する。大学院生については発表をしない場合も応募可能。
- (2) American Studies Association、American Studies Association of Korea、Organization of American Historians のいずれかの年次大会で発表する方を優先するが、これら以外の国際学会やシンポジウムで発表する場合も応募できる。
- (3) 他組織からの援助のないものを原則として優先する。
- (4) そのほか、助成の必要性、発表の内容を総合的に判断する。

3. 応募方法、結果発表、発表後の提出書類

- (1) 次の書類を6月16日から30日の期間に、5つ以内の添付ファイル（Word または PDF）にまとめて、学会 HP（<https://www.jaas.gr.jp>）右上に表示されている「お問い合わせ・応募」ボタンから、宛先タブで「国際委員会（学会参加旅費補助・プロセミナー報告応募など）」を選択し、送付すること。「お問い合わせ内容」には「JAAS 海外渡航奨励金応募」と記載すること。
 - ①履歴書
 - ②業績書
 - ③発表が受け入れられたことを証明する文書（電子メール可）
 - ④発表のタイトルと要旨（英語で250-300語程度とする）
 - ⑤（ASA、ASAK、OAH 以外での発表の場合のみ）当該国際学会やシンポジウムに関する情報（目的、歴史、規模等、字数は指定しないが、簡潔で正確であること）および開催期間
 - ⑥理由書（奨励金を必要とする理由。字数は指定しないが、簡潔であること。他組織からの援助のないものを原則として優先するので、申請時にほかの組織による援助を申請中か、あるいは援助を受けることが決定した者は、その旨明記すること。ほかの組織による援助のなかには、所属機関の研究費を充当する予定も含む。なお、旅費・宿泊費（実費）の不足部分に限り、他の補助金との併用が認められる。）
 - ⑦旅程表（日本出国から帰国まで順を追って記載すること。旅程が応募時に確定していない場合は、仮日程で構わない。応募後に旅程変更を行う場合は速やかに報告すること。）
- (2) 審査結果は、7月中に応募者に通知し、学会ウェブサイトで公表する。
- (3) 発表終了後、2週間以内に報告書（邦語1200字程度あるいは英語500語程度とする）および領収書の原本（旅費・宿泊費）を提出すること。報告書は、学会ウェブサイトに1年間掲載する。

4. 支給額

アジア圏の場合は一人5万円、アジア圏外の場合は一人18万円を原則とする。

* 本奨励金についての問い合わせは、学会 HP（<https://www.jaas.gr.jp>）右上に表示されている「お問い合わせ・応募」ボタンからお寄せください。お問い合わせフォームの「宛先」タブで「国際委員会」を選択し、「お問い合わせ内容」には「JAAS 海外渡航奨励金」と記載してください。

国際委員会

日米友好基金による旅費・滞在費補助金の受給者について/2024 年 ASA 大会

2024 年 11 月 14 日から 17 日まで、ボルチモアにおいて開催された American Studies Association (ASA) 年次大会への旅費・滞在費補助金の受給者として以下の4名が選ばれました。おめでとうございます。

阿部啓会員（アラバマ大学博士課程）、加藤慶会員（イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校博士課程）、木村智会員（ハーバード大学博士課程）、尾崎永奈会員（ボストン大学博士課程）

国際委員会

American Studies Association 派遣来日研究者について

2025 年のアメリカ学会第 59 回年次大会には、諸事情により ASA の研究者が派遣されないことになりました。

国際委員会

Organization of American Historians 派遣来日研究者のお知らせ

2025 年度の OAH/JAAS Short Residency Program による派遣研究者が次の2名に決まりました。このプログラム

はアメリカ史を中心に、日本の大学院生、学部学生の指導と研究者の相互交流を目的とするもので、研究者は各大学に約2週間滞在します。研究者の専門領域、受け入れ校と担当者、滞在期間は以下の通りです。

Rebecca L. Davis (University of Delaware)

専門領域：結婚、宗教、セクシュアリティ、政治史

受け入れ校・担当者：白百合女子大学・箕輪理美会員

滞在期間：5月27日から6月6日まで

Cara C. Caddoo (Indiana University, Bloomington)

専門領域：映画、メディア史、人種・エスニシティ、社会運動史

受け入れ校・担当者：同志社大学・和泉真澄会員、南川文里会員

滞在期間：5月22日から6月4日まで

国際委員会

American Studies Association of Korea 派遣来日研究者のお知らせ

アメリカ学会第59回年次大会に参加する派遣研究者が次の1名に決まりました。

Jungha Kim (Seoul National University)

専門領域：アメリカ文学、アジア系アメリカ人研究、批評理論

国際委員会

会員みなさまにお願い

ご住所・所属等の変更が生じた場合には、速やかに事務局（office@jaas.gr.jp）までお知らせください。また、メールアドレスを登録されていない方は、極力ご登録くださいますようお願いいたします。

新刊紹介

野口啓子・池野みさお・山口ヨシ子 編著

『アメリカ文学にみる女性の教育』

(彩流社, 2024 年, 3,300 円)

本書は 2021 年に逝去された津田塾大学名誉教授の板橋好枝氏へ捧げる追悼論文集であり、同大学言語文化研究所のプロジェクト「女性像研究会」での活動を通じて彼女の薫陶を受けた執筆者たちによる 12 の論文から成る。各論文で基本的に一人のアメリカ人女性作家を取り上げ、建国期から 21 世紀のはじめに至るまで、女性の教育という観点から彼女たちの作品を読み解いている。本書における教育というキーワードは、いわゆる学校教育に限らず、作中の登場人物たちの精神的修練や、作品が読者や社会へ促す意識改革を広く指すものとして、各論者によって使い分けられている。

二部構成の本書の第一部は、建国期からアメリカン・ルネサンスまで対象とする。野口啓子は、フォスターの感傷小説『コケット』(1797) に込められた、良い教育を受けた女性にそれを生かす場を与えない社会への非難を喝破する。M・J・ディニウスは、アフリカ系活動家マライア・スチュアートのエッセイ (1831) に平和的教育を通じた社会改革の希求を読み取る。山口ヨシ子は、サウスワースの『捨てられた妻』(1850) における女性のエンパワーメントを、作家の伝記的背景や初期作品の分析を交えながら論じる。藤井久仁子は、カミンズの家庭小説『点灯夫』(1854) をウォーナーの『広い、広い世界』(1850) と比較し、対人関係を通じた教化の観点から主人公の少女の成長を分析する。黛道子は、アン・S・スティーヴンズのメロドラマ『古き屋敷』(1855) で描かれる、孤児の少女の家庭や社会での経験を通じた成長に、作家の社会改革的思想を見出す。矢島里奈は、ジェイコブズの奴隷体験記 (1861) の、奴隷制廃止のみならず女性の意識改革を啓発する教育的側面を明らかにする。

第二部では、南北戦争から 20 世紀転換期までを扱う。池野みさおは、作家オルコットの、両親による影響を多分に受けた教育的背景から『若草物語』をはじめとした彼女の作品群を読み解く。渡辺佳余子は、正規教育を受ける機会に恵まれず、独学でフェミニズム活動家として大成した「黄色い壁紙」(1892) の書き手ギルマンを再評価する。大西由里子は、ショパンの『目覚め』(1899) における黒人女性登場人物が主人公エドナに及ぼした教育的効果を指摘する。相木裕史は、ウォートンの『歓楽の家』(1905) の主人公リリーが孕む攪乱性を、当時の女性教育を巡る文化史的背景と、視覚的客体から視覚的主体への「教育」という論点から解剖する。羽澄直子は、バーネットの『秘密の花園』(1911) の、自律的に自己を教育する子どもとしての主人公メアリ像を提示する。小倉咲は、キャザーの『マイ・アントニア』(1918) の語り手ジムとアントニアの、互いの自己理解を促し教育しあう関係性に着目する。

以上みてきたように、本書は、時代や出自、人種の異なる多様なアメリカ人女性作家による作品群を広く「教育」という観点から照射する、魅力的な一冊となっている。

細野香里 (慶応義塾大学)

菅 (七戸) 美弥・北村新三 著

『南北戦争を戦った日本人—幕末の環太平洋移民史』

(筑摩書房, 2023 年, 1,870 円)

まずもって、書名に好奇心をくすぐられる一冊である。南北戦争に従軍した日本人がいたとは、にわかには信じがたいことだが、本書の冒頭で日本生まれの 2 人の兵士、ダンとウィリアムズの兵役記録が紹介される。両者は入隊のタイミングや所属した連隊は異なるものの、ともにブルックリンで連邦軍に入隊したという。彼らはいったい何者で、いかなる動機や経路により、渡米そしてニューヨーク州での入隊に至ったのか——著者のみならず読者も、このような疑問を抱かずにはいられないだろう。本書では、その答えに迫るべく、幕府が海外渡航を厳しく制限していた時代における環太平洋の日本人の移動、および海外での日本人同士の接触の諸相が描き出される。著者は 2 人の人物像を絞りつつ、海外にいた日本人を取り巻く史実を丹念に紡いでいる。

日本人兵士と南北戦争との関わりについては、同時代にアメリカにいたアジア・太平洋系 (特に中国人) の兵士のおかれていた状況が、最初の手掛かりとなる。異国の地で従軍する経緯や軍隊での立場、本名を剥奪される慣行など、マイノリティの兵士たちの境遇や体験は、ダンやウィリアムズのそれと重なりうるはずである (第 1 章)。そもそもなぜアメリカに行き着いたのかをめぐっては、彼らが漂流者なのか密航者なのか、著者は想定しうるあらゆる方向に探りを入れる。2 人が公的な使節団や咸臨丸からの脱落者などであった線も考えられるため、公式の移動と非公式の移動のいずれかに限定せず、海外にいた日本人に網羅的に光を当てるのが、先行研究と異なる本書の特徴となっている (第 3 章, 第 4 章)。

なお、本書で掘り起こされる移民の行動や体験には、欧米の船員と似通った要素が散見される。例として、中国人移民が複数人で同時に海軍に入隊したことは、同輩とともに働き口を探した欧米の船員の行動傾向を想起させる。また本書では、日本人の漂流者にとって、海外での他の日本人漂流者との邂逅が当人の行く末を好転させる鍵であったことが明かされるが、船員の場合も不案内な土地では他者の助力が命運を左右し、現地の同国人や同郷者を頼ることもあった。本書にも描かれるように、移民とアメリカの船員は、洋上はもちろん陸でも接点を持ちえたのであり、ともに海を介して移動した彼らの体験に部分的な類似性がみられるのは興味深い。

最後に、本書の別の魅力にも触れておくと、それは、著者が試みた史料との対話が明快に綴られているところであろう。使われた史料は従軍記録やセンサス調査票にとどまらず、兵士 2 人の戦後の消息もつかもうとする調査の手は新聞記事や帰化申請書類、さらには死亡記録や墓の情報にまで及び、抜かりがない (特に第 2 章)。膨大な史料の海から彼らに結びつく情報を探索し、説得力ある推論をめぐらせていく本書の筆致は、まさしく歴史学の醍醐味を読者に伝えるものである。

笠井俊和 (群馬県立女子大学)

杉野健太郎責任編集・日本映画学会監修

『アメリカ映画史入門』

(三修社, 2024 年, 4,180 円)

『アメリカ文学入門』(2013、新版 2023)、『アメリカ文化入門』(2010、新版 2023)、『アメリカ文学と映画』(2019) など、大学の授業で教科書としても活用できる一般書を刊行している出版社によるアメリカ映画に特化した入門書である。これまでの入門書刊行から得られた蓄積を踏まえ、「第 I 部 アメリカ映画の歴史」、「第 II 部 アメリカ映画研究の主要テーマと研究方法」に加え、「巻末資料」として、「レポート・卒論の書き方」、「文献資料案内」、「映画用語集」も充実している。

近年、映像や映画に特化した学科やコースでなくとも、映画を軸にしたアメリカ文化にまつわる授業が多く開講されるようになり、ゼミや卒論でアメリカ映画をとりあげる事例も多くなってきている。映画を題材にレポートや卒論を書く際に現代思想をいかに活用しうるかについて実践例を踏まえて指南する入門書として、鈴木健『現代思想を使って映画批評!』(小島遊書房、2025) や、アメリカ映画を通してアメリカ文化の最新動向を探る一般書、渡辺将人『アメリカ映画の文化副読本』(日経 BP、2024) も相次いで刊行されている。ストーリーミングサービスの普及により映画の視聴が手近なものになったことから、アメリカ研究における映画の活用はますます増えていくことだろう。

ロバート・スクラー『アメリカ映画の文化史——映画がつくったアメリカ(上・下)』鈴木主悦訳(講談社学術文庫、1995)、北野圭介『新版ハリウッド 100 年史講義』(平凡社新書、2017) などの類書と比して本書は、通史、監督・作品のガイド、「階級」「人種・エスニシティ」「ジェンダー」「セクシュアリティ」などのテーマ別による研究視点のコラムを擁した構成により、初学者から専門的な段階に至るまでの基礎資料が一冊に網羅されている点に特色がある。ともすれば、インターネット上の粗略な情報に依拠しがちな近年の学生気質に対して、参考文献紹介を交えた実証的な評伝、映画史上の位置づけが簡潔に記されている監督・作品ガイドはデータベースの観点からも有益である。

指定教科書とするには価格が比較的高額ではあるが、ゼミ・卒論と連動した活用が期待される。「ジャンル」「ドキュメンタリー」のテーマ項目はもう少し多くの分量で読みたいところではあるが、紙数の制約から充分であろうし、各コラムが的確に要点をまとめていて、さらに個別の領域の参考文献に導いている。

アメリカのジャンル映画の発展史を展望する上で欠かせない、いわゆる「ヘイズ・コード」についても、「映画製作倫理規定」が解題と共に収録されており、他にも「歴代興行収入トップ 50」や「テレビ所有率・ケーブルテレビ加入率」など「巻末資料」のデータ集も研究への汎用性が高い。大学生のみならず、アメリカ映画について講じ、論文指導を担う教育研究者にとっても学びが多い一冊であり、映画を活用したアメリカ文化研究にまつわる教育の行方を展望することができる。

中垣恒太郎(専修大学)

小森真樹

『楽しい政治—「作られた歴史」と「つくる現場」から現代を知る』

(講談社, 2024 年, 2,750 円)

本書は、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により「フィールドに行けないフィールドワーカー」となった著者が、パンデミック下の人々にとって最も日常的なフィールドだったオンライン上の言説空間や映像系 SNS を観察・記録したウェブメディアでの連載が元になっている。タイトルにもあるように、キーワードの一つは「政治」だが、これは選挙、政治家、政党、政争といったリアルポリティクスを指すのではない。本書によれば、政治とは「いろいろな意見や立場の人々が共存するためのツール」、つまりお互いを知る・知ってもらうためのコミュニケーションの手段である。そして、知ることによって生まれる主体的な関わりは「楽しい」ことに転じると著者は主張する。逆に、知る機会がなく、他人事である限り、人は無関心のままである。そこで本書は、日本の若者にとって適度な距離感があるため、知りやすく、楽しみやすいであろうアメリカの文化や社会運動を、「楽しい政治」のためのレッスンとして提示する。

上記のような観点からポピュラーカルチャーの政治学を論じる本論は大きく二部に分かれ、第 1 部「つくれた歴史から〈構造〉を知る」では、「ルールや常識が社会に埋め込まれてきた」歴史的な経緯に注目する。具体的には、映画やテレビドラマを通して、その背景にある人種、民族、ジェンダー、経済格差などの社会問題が解剖される。たとえば 6 章では、白人男性で「知的」なミュージシャンとして評価されてきたデイヴィッド・バーンによる舞台『アメリカン・ユートピア』とスパイク・リーが監督したその映画化作品が取り上げられ、アートの特権性を自省するバーンの繊細な語りから、警察暴力への批判や選挙登録の呼びかけのような直接的なメッセージへのダイナミックな転回が明らかになる。

第 2 部「つくる現場から〈コミュニケーション〉を知る」では、社会を変えるためのツールとして社会運動が論じられる。BLM をはじめとしてハッシュタグ・アクティヴィズムや各種のデモ、記念碑や博物館の変革、名称変更運動が盛り上がる中で、異なる立場はいかに関わり、対立、交渉、対話、妥協、融和といった「落としどころ」はどのように見つけられるのだろうか。一例として 14 章では、「カエルのペペ」がインターネット上のミームとして作者の意図に反してオルタナ右派のアイコンに転用され、さらにまた別の意味が派生していった顛末を題材に、無意味な意味を生んでいく陰謀論やエセ科学のメカニズムが説き明かされる。

本書で取り上げられた多数の映画、映像作品や社会運動の解釈については、アメリカ学会会員の専門家からはおそらく異論が出ることもあるかもしれないが、そうした意見の相違を巡るにぎやかな会話もまた著者の狙いであり、我々がその一部をなす政治に関わっていく楽しさなのだろう。巻末には「『楽しい政治』のためのキーワード事典」も掲載。

丸山雄生(東海大学)

佐々木真理 著

『アメリカ文学との邂逅 アーシュラ・K・ルグイン——新たな帰還』

(三修社, 2024 年, 3,800 円)

本書はSFとファンタジーの新たな道を開拓し、ジャンルすら超えて世界中の読者を獲得したアーシュラ・K・ルグインの作家としての軌跡を、長編作品を中心に網羅的に論じた待望の新刊である。ルグイン研究の新たな地平へと、あるいは「新たな帰還」へと誘う珠玉の一冊である。

第1章「始まりの場所」では、『オルシニア国物語』とロカノン三部作を分析し、自らの主題を言語化するため模索した初期作品の特徴が明かされる。詩や短編、エッセイやインタビューを援用し、「苦しみから回復する力にこそ、人間性の希望を見出そうとするルグインの姿勢」(p.70)が立ち上がる。第2章「二つの旅」では、『影との戦い』『闇の左手』を中心に、ルグインにおけるファンタジーの意義について解説される。SF執筆に乗り出しながらも、アメリカ社会におけるSFの受容という問題に直面していたルグイン。しかしその苦境を超えて、SFは「当然と見なされている現実や認識を揺さぶり、別の可能性を見せてくれるもの」であり、ファンタジーは「単なる現実の揺らぎを突き抜け、その奥底にある真実へと導く」(p.78)景色へと辿り着く。ファンタジーやSFと向き合う中で、ルグインがいかに老荘思想とネイティヴ・アメリカンの自然観や神話を考慮するようになったのかに関する分析は必読であろう。

第3章「めぐる旅路の果てに」では、『こわれた腕環』『さいはての島へ』『天のろくろ』『世界の合言葉は森』『所有せざる人々』を主軸とし、これらの作品が従来のファンタジーの枠組みを「再生産すると同時に越境する作品」(p.127)であることが明示される。第4章「彼女たちの声」では、『アオサギの眼』『オールウェイズ・カミングホーム』『帰還』を基に、ルグインは、どのように女性が主体となる物語を書き継げばよいのかという苦悩を乗り越え、他者との共生、連帯、自立、そして自由について描く。それまで物語の中央に立つことがなかった強さと自己を備えた女性の「新たな声」の存在感が輝きを放つ。そして、なぜ、『帰還』でアースシーの世界を「語り直した」のか解明されていく。第5章「過去との対話、そして最後の旅へ」では、「新たなハイニッシュ・ユニバース・シリーズ」「最後のアースシー作品」「西のさいはての年代記』『ラウイーニア』を主軸に、「言葉が受け取られる瞬間の重みと力」(p.358)について分析し、言葉と想像力の新たな可能性を明示して、モチーフは変奏されながら帰還へとつながる。

作家ルグインとしての旅の始まりから、アメリカ社会や歴史、同時代の文学や批評の潮流、文学とジェンダーとの関わりを、学術的かつ複眼的に分析した本書は、ルグイン研究の成果と可能性とを見事に浮かび上がらせ、アメリカ研究においても有益な研究書になるだろう。

熊本早苗 (岩手県立大学)

古井義昭 著

『誘惑する他者——メルヴィル文学の倫理』

(法政大学出版局, 2024 年, 3,520 円)

文学研究に携わっていると、哲学や倫理学の領域をどうしても避けられないときがある。ましてや、ジル・ドゥルーズやジョルジョ・アガンベンら名立たる哲学者を魅了してきた作家ハーマン・メルヴィルについて論じようとするならば、なおさらである。しかし、文学テキストの読解にある哲学者の主張を応用するとき、図らずとも哲学のために文学を利用してしまふ危険と常に隣り合わせであることを忘れてはならない。文学研究者であれば、文学のための哲学とは何か、との問いに対する自分なりのスタンスを定めておく必要がある。そうした問いと向き合っていくなかで、本書は必ずや私たちを手助けしてくれるだろう。

古井氏が論じる倫理とは、まさに文学のための倫理である。本書は、メルヴィルによる10作品の精読から、他者を〈書くことの倫理〉、〈読むことの倫理〉を探究する。前者が「他者性への暴力を回避しながら他者の内面を描く作家の姿勢」(2)であるならば、後者は「他者性を侵害せずに他者の内面を想像する読者の態度」(2)である。著者は、メルヴィルにとっての倫理が「捉って立つべき一つの基準」(11)ではなく、「不確定性のなかで他者について思考し続ける動的姿勢」(11)であると繰り返し主張する。つまり、いつどの作品にも使える万能な倫理というものはありません。文学を書き、読むためには、その作品のためだけに詠えた特注の倫理が求められるということである。これは、文学のために哲学(倫理学)と向き合うためのひとつの解答であろう。倫理の一般性を作品に振りかざすのではなく、あくまでその作品側から抽出される倫理の個別性や流動性にこだわる古井氏の姿勢は、多くの文学研究者を勇気づけてくれる。

メルヴィルが描く他者の特徴を一言で表すならば、それは沈黙である。こうした他者は、読者の前に壁のように立ちはだかり、理解されることを拒んでいるように見える。とはいえ、メルヴィルは注意深い読者だけが発見できるように、沈黙する他者の内面を覗き込める(古井氏流に言えば)「裂け目」を仕込んでいる。本書は、作品ごとに潜む「裂け目」に光を当て、他者理解とその暴力性のはざまで悩むメルヴィルの姿を浮き彫りにしつつ、読者である私たちにも同様の問題を投げかける。

このような暴力の責任は、作家、批評家、一般の読者それぞれに対して等しく生じる。自分ではない者を描く作家、その作家を解釈の対象として読み、書く批評家、さらに、その批評家を理解しようとする読者、というように、私たちは他者理解につきまとう罪の連鎖から逃れることができない。しかし、本書の最終章「ビリーを撃つ」が論じるように、ある他者を描くとき、一視点からの語り終始せず複数の物語を併存させ、他者をあくまで複数的で決定不可能なものとして「書くことによって書かない」(18)メルヴィルの戦略は、私たち自身をそこから救い出す一つの方法を示しているともいえるのではないか。

鈴木一生 (九州工業大学)

西谷拓哉・高尾直知・城戸光世 編著
『ロマンスの倫理と語り——いまホーソンを読む理由』

(開文社, 2023 年, 5,280 円)

日本ナサニエル・ホーソン協会創立 40 周年を記念して編まれた本書は、ホーソン作品が現在も読み継がれ、議論される理由を探る刺激的な論集である。三部構成、全 22 編からなる本書は各論者の精緻な読解を通して作家や作品の多様な側面を浮き彫りにする。以下、それぞれの論考を簡単ながら紹介する。

第 1 部「ロマンスの倫理」の冒頭を飾る城戸光世は、他者との関係性をめぐる倫理性をホーソン文学の要諦とし、本論集の基調を提示する。佐々木英哲は精神分析批評の視点に依拠しつつ共同体からの疎外を論じ、下河辺美知子は恐怖と暴力の重層性に焦点を当て、革命期アメリカの心理的力学を抽出する。成田雅彦は短編「瘧」に先住民の排除を読み取り、白人社会の無意識的暴力を論じる。林姿穂は植物と女性表象の分析からラフカディオ・ハーンとの意外な影響関係を指摘し、小南悠は『緋文字』における共同体の病理を天然痘の歴史と関連づけてスリリングな読解を提示する。同作を扱う野崎直之は障害学やエコフェミニズムの視点から、他者との相互関係に基づく存在論について思索する。中西佳世子は暖炉のモチーフに着目し家庭神話の危うさを、大野美砂は労働と奴隷制の問題を通じて中産階級家庭の抑圧構造を分析するが、そのような家族制度から逸脱するポリアモリーな親密圏を探る齊藤園子の議論も作家の性愛観を考える上で興味深い。

第 2 部「倫理と語りの中間地帯—埋葬をめぐるロマンス」には、前後のセクションを架橋する論考が集められる。小宮山真美子は「未完に終わる埋葬」のモチーフを通して死者の声に耳をすまし、生田和也は短編「ロジャー・マルヴィンの埋葬」における植物表象を分析し、作家の環境倫理的視点を探る。高橋愛は同作における男同士の絆への欲望とその攻防を読み解く。

第 3 部「ロマンスの語り」では、ホーソンの文学的手法が精査される。上原正博はロマンス論を物語技法の視点から検討し、大川淳はテキストの身体性を軸に短編を分析する。竹井智子は群衆と鉄道の関係を論じ、主体の喪失の問題を提起する。川下剛は『ブライズデール・ロマンス』の演劇性を、石川志野は死者の描写の絵画的性質を掘り下げる。高尾直知は『アフリカ巡航者の日誌』の編集過程を丹念に分析することで作家の女性観と人種観を探る。辻祥子は作家晩年の創作の行き詰まりについて果敢に挑むが、丹羽隆昭は作家の最期の旅を辿り、その伝記的意義に迫る。最後に貞廣真紀はアメリカ文学史の構築過程を見据え、息子ジュリアンの活動の軌跡を追うことで、作家の死後の作品受容の変化を鮮やかに提示する。

本書はホーソン作品の現代的意義を明らかにすると同時に、文学研究が現実社会と地続きであることを体現している。様々な他者をめぐる倫理の問題が喫緊の課題となる現代において、日本ホーソン協会が積み上げてきた成果を引き受け、各論者の手腕が存分に発揮された本論集は、専門家のみならず広く読者を啓発する良書と言えるだろう。

小椋道晃（明治学院大学）

『アメリカ研究』第 60 号「自由投稿論文」募集のお知らせ

学会機関誌『アメリカ研究』（年報）は 2026 年 3 月に第 60 号を刊行する予定です。会員諸氏の積極的な投稿をお待ちしております。

1. 内容

アメリカ研究に関する未発表論文。前年度『アメリカ研究』もしくは『英文ジャーナル』に論文が掲載された方は、本年度の投稿をご遠慮ください。また、同じ年度に、あるいは年度をまたいで『アメリカ研究』と『英文ジャーナル』の双方に投稿することはできません。これはなるべく多くの会員に発表の機会を提供するためです。

2. 枚数

論文は 33 字×34 行のレイアウトで 19 ページ以内（註を含む）。

執筆要項は学会ホームページを参照のこと。<https://www.jaas.gr.jp/the-american-review/writing-guidelines.html>

3. 原稿締め切り 2025 年 8 月 31 日（日）

4. 提出

投稿希望者は 2025 年 6 月末日までに、学会ホームページの「お問い合わせ・応募」フォームより年報編集委員会宛に「論文題目」をお送りください。論文原稿は電子ファイルによる提出となります。

年報編集委員会

『アメリカ研究』第 60 号「特集論文」募集のお知らせ

『アメリカ研究』第 60 号の特集テーマは、「ローカル・アメリカ」です。趣意は以下の通りです。

ローカルという言葉は多義的である。一般的に流通している意味としては、特定の場所あるいは限られた範囲の地域という地理的概念であろう。アメリカ研究でローカルとは何かを考えれば、そうした一定のエリアに住む人びともまたローカルと称される。その人たちはそこに住む地元人というだけでなく、その地で育まれた生活世界に生きる人びとで

ある。そして、その世界には独特な制度や習慣、精神文化が存在しており、それはまたこれらローカルな人びとが所有し、この人たちを特徴づけるものでもある。ローカルという言葉はその地に根差す独自の組織を指す場合もある。政治に目を向ければ、ローカルは正式な政治用語として使用されている。州によって違いはあるものの、それを構成する郡やさらに小さな単位としての自治体はローカルとして位置付けられる。地元の政治家や政治組織を形容する場合にもローカルが用いられる。また、労働組合の支部もローカルと呼ばれる。日本の全国紙のような存在がない新聞をはじめとしたメディアではローカルな媒体が果たす役割とその影響力は非常に大きい。

こうしたことから、ローカルは単に地理的範囲を限定する概念としてだけではなく、その地に独特な根拠—それは政治経済的な権益や人的関係だけでなく風土や精神文化も含む—を有しているものを包含していることが分かる。多義的な意味を持つローカルを視点に据えてアメリカを眺め直すと、どのようなアメリカが浮かび上がってくるだろうか。大統領が選ばれるまでの過程においてローカル・ポリティクスを持つ重要性は言うまでもない。全国遊説のキャンペーンではその地に応じたアピールやロジックが用いられ、演出が施される。それは取りも直さず、アメリカの津々浦々にローカルな地に生き、その地で人生を全うする人びとが少なからず存在していることを意味している。経済的な面でもローカルな地の生活を支えるための方策や産業の存在が持つ意味は非常に大きいだろう。ローカルとしての労働組合はまさにその関係の中において存在意義を持っている。ローカル・メディアはそのような中に生きる人びとの動向を伝え、その地の人びとはそれらが発信する情報を共有するのである。歴史研究ではローカルな地に生きる人びとやそこで築かれる人種やジェンダー関係などへの関心が向けられてきた。文学でもローカルな地に存在する独特の世界と精神文化、そこに生きる人びとの在り方がさかんに描かれてきた。

次号の特集では「ローカル・アメリカ」をテーマとして、そこから抽出されるさまざまなアメリカの側面を検証する。多方面からの投稿を期待したい。

「特集論文」に応募希望の会員は、2025年6月末日までに、氏名・所属・論文題目および構想・資料などの説明（400字程度）を学会ホームページの「お問い合わせ・応募」フォームより年報編集委員会宛にお申し込み下さい。その際、上記フォームの「お問い合わせ内容」欄に「『アメリカ研究』特集応募」と明記してください。

執筆要項は学会ウェブサイトを参照のこと。

<https://www.jaas.gr.jp/the-american-review/writing-guidelines.html>

原稿締め切りは2025年8月31日(日)とします。

年報編集委員会

新入会員（2025年3月15日現在）

安田貴雅	神戸大学（院）	日、外
坪野圭介	和洋女子大学	文、化、衆
小川凜	明治大学（院）	政、衆、その他
渡久山幸功	琉球大学	文、衆、化
加藤喜之	立教大学	宗、政、思
小椋郁馬	一橋大学	政

（* 入会申し込み順。専門領域の略記については、PDF版会員名簿作成用アンケートおよび学会ホームページに記載されている新表記法による）

訃報

紀平英作元会長（京都大学名誉教授）が2025年2月4日にご逝去されました。常にアメリカ民主主義の可能性を信じ、戦後世代の総合的な米国史像を探究された紀平先生は、2010年6月から2年間にわたり会長を務められました。先生のアメリカ学会への長年のご貢献に感謝を申し上げるとともに、心からご冥福をお祈りいたします。

編集後記

この2月にリサーチでワシントンDCを訪れた際、スミソニアン・アメリカ美術館で「帰属の絵画」と題された日系アメリカ人女性作家3名の展覧会を観た。日系人強制収容という悲惨な出来事によって歴史から排除されてきた芸術家をアメリカ美術史のなかにきちんと位置付けようという包摂の試みであるが、まさにホワイトハウ

スの再入居者がDEI排除政策を押し進めているときでもあったので、その対比に皮肉すら感じたものである。1期目のときよりも芸術界の反応は穏やかなようにも見えるが、はたしてこれからどのような動きが出てくるのだろうか。明日から今度はニューヨークへ旅立つので、そこでどういった作品や展覧会を観ることができるのか楽しみである。

（小林剛）

2025 年 4 月 30 日 発行

ア メ リ カ 学 会

〒550-0001 大阪市西区土佐堀 1 丁目 4-8

日栄ビル 703A

あゆみコーポレーション内

Tel: 06-6441-5260 Fax: 06-6441-2055

<https://www.jaas.gr.jp/>

発行人 中 嶋 啓 雄

編集人 南 修 平

印刷所 (株)国際文献社

〒162-0801 新宿区山吹町 358-5